

## 【パキスタン北部地震救援現場の実際】

### 呼吸器外科部長 中出 雅治

昨年 10 月 8 日に発生したパキスタン北部地震に対する国際赤十字連盟の救援活動に喜田、阪本両氏と共に本院より派遣され、私はパキスタン北西辺境州で展開したフィールドホスピタル(以下 IFRC 病院)で外科医として平成 17 年 10 月 24 日から約 2 ヶ月活動をしました。

日本で医療行為を行っている、特に本院のような病院では、自分が必要と思った検査ができるし、投与したい薬剤を投与することができ、手術室ではしたい手術をすることができることに何の疑問も持ちませんが、フィールドではこれらは当たり前のことではなくなります。日本語は通じず、限られた検査、薬剤、資材で、どれだけ来るかわからない患者さんを治療しなければならず、どうしても足りないものは自分で調達する術を考える必要があります。その一方で、収益のことは考えなくても良いし、日本で書かねばならない山のような書類はないし、毎日通勤電車に乗る必要もありません。

今回正式にオファーが来たのは 10 月 21 日(金)の午前中の外来の最中で、申し送りも不十分なまま、23 日(日)大阪発、24 日に北は秋田、南は福岡まで全員違う病院から集まった 10 名の日赤チームで成田発、イスラマバード経由で 26 日現地に到着しました。

連盟は比較的被害の少なかったアボタバードという町のアユブ病院という、大学や病院、研究施設等が集まった複合施設の敷地内の広い空き地(元はバラ園だったらしい)を IFRC 病院の建設地に選択し、ノルウェー赤十字が病院型の緊急対応ユニットを空輸し、我々が到着した時点ですでに 10 余りのテントを建てていました。ノルウェーチームは、欧米人は働かないという我々の常識をくつがえし、現地スタッフを雇いながら土日関係なく朝から夜まで日本人以上に精力的に働き、約 3 週間でテントを建設し、手術室と消毒用一式をセットアップし、電気関係を整備し、水道とガスを隣のアユブ病院から引き、車椅子やストレッチャーが通れるようにテント間に廊下を作りました。この間、医療スタッフは我々日赤チームだけだったため、看護師一人が薬剤師として薬局と資材関係の管理にあたり、師長は現地スタッフの雇用や病院建設などにかかりっきりとなり、残りの外科医 3、看護師 5 で約 100 人の入院患者さんをケアするという綱渡りの状態でした。

病院を一から作るということは、単に建物を作るだけでなく、病院のシステムやルールも一から決めなければならず、毎日ミーティングでルールが変わるといふことの繰り返しで、特に検温表の書き方と、外科医の処方書き方は我々の帰国直前までしょっちゅう変更され、後から来たスウェーデン人の麻酔科医から「ネバーエンディングストーリー」と茶化される始末でした。このころパキスタンはイスラム教のラマダン月で、この間は昼間どこへ行っても食べるものを売っておらず、我々もほとんどラマダン状態で仕事をしていました。



手術室

3 週目に入ると病院建設も一段落し、システムも徐々に整い、また医療スタッフも、パレスチナ赤十字(小児科医)、ニュージーランド赤十字(看護師×6)、スウェーデン赤十字(麻酔科医)が合流し、薬剤師も来て、ようやく国際チームらしくなりました。この頃には現地スタッフも固定し、看護師、看護助手、通訳など約 70 名を雇用、看護師も三交替勤務を組めるようになりました。レントゲン室ができ、またイスラマバードに派遣されていた本院検査部の喜田さんが来て検査室をセットアップしました。日赤看護師は優秀な人が多く、日本の看護師のレベルは世界でもトップクラスだと思いますが、問題はコミュニケーションツールである英語でした。



病棟テント内の様子

患者さんは被災地から隣のアユブ病院に紹介された患者さんがアユブ病院でさばききれないため、こちらへ回ってきます。95%くらいが外傷で、そのうち4分の3が下肢、残りが上肢や顔面、頭部の外傷でした。従って2ヶ月間で行った120余りの手術のうち、8割は整形外科(創外固定、四肢切断、デブリドマンなど)、2割は形成外科(広範囲の皮膚欠損に対する皮膚移植)という具合でした。このような環境下でどの程度の医療を提供できればよしとするのかはいつも答えが出ない問いなのですが、とりあえず術後合併症、死亡退院共なく今回の派遣を終えることができ、その点ではほっとしています。

今回 IFRC 病院では多国籍チームであると同時に多くの地元スタッフを雇用して彼らと一緒に働き、それが非常に良好な関係で派遣を終えたため、我々の帰国が近づくと、患者さん、地元スタッフが、日本人が帰るなら自分達も帰るなどと言い出し、我々の出発日の昼にミーティング用テント前で行った小パーティには、動ける患者さんは総出でやってきて病棟はガラガラになり、スタッフも皆仕事を放り出して集まってきて大撮影大会が始まり、テントの内外がごった返す状態でした。特に病棟で患者さんや地元スタッフと長時間接する看護師達は、今回の派遣でウルルンの百倍くらい感激して帰ってきた人もいました。

その後、IFRC 病院は、アイスランド、ノルウェー、バングラデシュ、マレーシアの各赤十字からのスタッフに引き継がれ、現地からの連絡では2月23日に病院を撤収するという事です。しかしながら現在厳冬のパキスタン北部、特に山岳地帯では、医療支援以前に、通常的生活そのものが脅かされる状態にあることが想像され、彼らに十分な支援がいつていることを祈るばかりです。



病棟テントを回診する中出医師